

# 第6章： 子どもの権利としてジェンダーの平等 を推進する

ジェンダーの平等は、開発のすべての分野で推進されなくてはならないため、ユニセフは事業分野のすべてで、ジェンダーに関連した活動を中核的に組み込んでいる。女子差別撤廃条約<sup>3</sup> (CEDAW) という人権の枠組みに基づき、ユニセフは、政府や民間組織と共に、CEDAW実現への進捗状況を監視するCEDAW委員会への定期報告書作成に関わっている。委員会はこれに対し、提案を行い、国はこれに基づきフォローアップの中身を決め、ユニセフのカントリー・プログラムも、これを参考に決定される。2008年以来、ユニセフのすべてのカントリー・プログラムは、子どもの権利条約 (CRC) あるいはCEDAWのガイドラインに沿う形になっている。

2009年、国連総会は、ジェンダーの平等に関する国連システム内の活動をまとめ、拡大することで合意した。そのため、女性の人権を世界に働きかける顕著なアドボケート (唱道者) 役となる、使命、資源、人材が整った、ジェンダーを専門とする新組織を設置することとなった<sup>4</sup>。これに際し、ユニセフは、この組織が設置され次第、緊密に連携できるよう準備を整えた。

## 記録的な高さ：女子の通学率

ユニセフは、継続して、女子の通学の権利を働きかけていること (P.31 の囲み記事を参照) と、女子教育への投資を拡大していることで知られている。過去10年の間、世界的に、初等学校に就学していない女子の割合は低くなった。ほとんどの国で、初等教育就学率でのジェンダーの平等は、目標達成が可能な状態にある。2009年、国連女

子教育イニシアティブを通して、世界的な働きかけが続いた。このイニシアティブは、ユニセフが主導する世界的なパートナーシップであり、女子を学校に通わせるための努力を結集したものである。ユニセフは、教育へのアクセス面でのジェンダーによる格差、そのほかの格差に対処するため、学費廃止イニシアティブを支援した。

ジェンダーの平等は、ユニセフが支援する「子どもに優しい学校 (CFS)」アプローチになくはない要素である。カンボジアでは、特定の県で試験的に導入した後、2008年に政府がすべての学校をカバーする形で、これを国家政策として取り入れた。2009年に政策を展開するあたり、ユニセフは、ジェンダーの平等への進捗度などを含む、既存CFSのジェンダー平等への達成度を調査した。この調査は、国の計画として今後拡大される予定である。3年分のデータをもとにしたとき、CFSに通うカンボジアの女の子たちは、教育を修了し、そして主に女性教員が運営する女子カウンセリング・ネットワークの支援を受けている学生委員会に参加する傾向にあることが分かった。ユニセフは、CFSを拡大できるよう、国の中の能力育成—特に教員の能力育成—に力を



ユニセフの支援のおかげで、パキスタン紛争で避難民となった女の子でも、ハビバのように、避難民キャンプの中の小学校に通うことができるようになった。

3 「女子に対するあらゆる形態の差別の撤廃に関する条約」が正式名。

4 参考：<http://www.unwomen.org/>

## パキスタン：教育に関する変化

ハビバは、クラスのほかの女の子よりも歳が上に見える。彼女自身、自分の歳を把握していないが、だいたい12歳くらいだと思っている。それというのも、パキスタンでは、女の子の多くが出生登録されていないからである。スワット・バレーでの衝突によって、ヤル・フセイン・キャンプに避難してくるまで、彼女の役割は弟妹5人の面倒をみることであった。

ハビバの家族は保守的な家庭の出身。男性の付き添いなしには外を出歩けない。(父親は海外ドバイで出稼ぎをしており家にいない。) たとえ、家の回りで爆撃が起きても、彼女は弟妹たちを安全な場所に連れていくことはできないのである。ハビバと弟妹たちは、2週間の間、爆撃のもと、家の中で身を寄せ合って過ごした。父親が海外から戻ってきて初めて、ハビバたちは避難できたのである。

キャンプで、ハビバは新しい世界を探検し始めた。ユニセフが支援する小学校に通い始めたのである。ユニセフはヤル・フセイン・キャンプにいるハビバのような女の子たちに教育を提供しようと努力した。研修を受けた人たちを動員して、子どもたちを学校にやるよう、一軒一軒まわって親を説得してもらったのである。学校生活は、紛争によって生活が混乱した小さな子どもたちに、正常な生活に戻るきっかけを作ってくれる。スワット・バレーが位置するパキスタンの北西辺境州では、初等教育就学年齢に該当する子どもたちの半分以下しか学校に通っていない。女の子の場合は38%である。15歳以上の女性と女子の識字率は

27%にとどまっている。

2009年末までに、北西辺境州と連邦直轄部族地域での紛争の影響を受けた、300万人以上の人々が、避難民キャンプやホスト・コミュニティ(避難民たちを住まわせてくれる村や町)に移動した。ユニセフは女の子たちに、学校に通い続けるよう助言している。これは女子教育を促進するという広い目的の一部でもある。北西辺境州の紛争が起きていない地域で、ユニセフは、小学校、中学校に460人の女性教員と学校運営者を配置する支援をした。これは女性が運営する学校に娘たちを送り込みたいという親たちの気持ちを汲んでのことであった。その結果、1年生から8年生までの3万人以上の女子が、途中退学することなく教育を続けた。シンド州では、376の女子校が開されたが、女性教員は500人、女子の児童数は12万5,000人に上る。

ユニセフは、国内では政策立案者と協働し、ジェンダーの平等が教育関連の計画に組み入れられるように努力している。就学前教育に関する新国家基準と、学校での水と衛生施設に関する新国家基準は、女子にも恩恵をもたらすものとなっている。ユニセフは、「教育政策でのジェンダー支援」プロジェクトの主要なメンバーとして活動し、一貫してジェンダーにスポットライトが当たるよう配慮している。情報面での格差を探る調査を通して、また、教育制度の中で、ジェンダー部門に特化した部門からの助力を得て、女子の学習促進に尽力している。

入れている。

女性教員は、女子にとって特に魅力的なロール・モデルとなり得る。2009年、ナイジェリアでは、ユニセフ、州政府、教育を専門とする北部4州の大学によるパートナーシップで、若い女性800人を対象とした、教員になるための研修を実施した。教員候補の女性に助成金を支給し、辺境の農村部で教員になり、女子教育を促進してもらおうというのが州政府の狙いである。大学の次の学期からは、候補者を1,075人に増やす予定である。アフリカ女性教育者フォーラムのエチオピア支部と協働して、ユニセフは教員への教育として、ジェンダーの平等についての研修を必須とする計画を作成した。

## 生存に関係する問題

女性の健康は、直接、子どもの健康に関係してくる(P.33の囲み記事を参照)。2009年、アルゼンチンは、デング熱と合わせ、H1N1インフルエンザ・ウィルスの脅威にもさらされた。国は、保健制度の予防・抑制手段を通して人々に情報を流し、関心を高めることに失敗したのである。5歳未満児と妊産婦が最も影響を受けたため、ユニセフは保健省と大学関係者、科学協会と共同で、政府の政策立案者やメディアに対して、科学的根拠を示した情報を提供した。この後、妊産婦へのH1N1リスクの呼びかけを含む、適切な情報を流した。

# 女性と女子の平等な権利を推進し、コミュニティ開発への全面的な参加を支援する——ユニセフの使命



HIV/エイズの影響を受けている国々では、子どもの成長の面で、今まで勝ち取ってきた前進が後退の脅威にさらされている。その原因の一部は、妊産婦からお腹の赤ん坊へのウィルスの感染である。HIVに感染して生まれた子どもの約半数は、2歳になる前に命を落とす。ジンバブエでは、ユニセフが主催した「マイル・プラス・チャンピオンズ（男性も一緒に）」というキャンペーンが4カ所で行われ、HIVの母子感染を予防する方法を、4万9,000人に伝えた。妊娠中のパートナーを支えるよう男性を促したことで、750人の男性が新生児ケア講習会に出席し、800組のカップルが任意のカウンセリングやHIV検査を受けた。

HIV検査、カウンセリング、モニタリングを組み合わせるサービスは、女性が自らの意思で、自らの健康と子どもの健康について選択することを可能にする。2009年に、ユニセフは、中国の女性団体と組み、包括的なサービス事業を提供した。これに参加した女性のうち、HIV母子感染防止のために早期から抗レトロウイルス薬を使った女性は60%に及んだ（以前は30%であった）。薬剤を使っただけの治療を行っている人も、60%から95%に増加した。

子どもの権利について敏感になるよう、女子と男子に教えることにより、子どもたちが成長するにつれ、ジェンダーによる障壁を取り除くような、新しい思考方法ができるようになる（P.34の囲み記事

を参照）。2009年に、ユニセフは、ナショナル・オリンピック委員会とベナン・フットボール（＝サッカー）連盟と組み、子どもの権利カップを競うフットボール（＝サッカー）大会を開催した。この国ではスポーツは通常男性がするものであるが、この大会には女子も参加した。ハーフタイムと試合開始前後には、600人の子ども（200人の女子を含む）が、フランス語とフォン語の両方で、子どもの権利条約について学んだ。

## あらゆる形態の暴力をやめさせる

ユニセフが取り組むジェンダーの問題の中で主要なものは、女性と女子に対するあらゆる形態の暴力と、これらの権利侵害を引き起こす偏見に満ちた慣習との闘いである。ユニセフは国連事務総長による「女性への暴力をやめさせるために結束しよう」キャンペーンに寄与した。このときは、結果枠組みの作成も支援した。ユニセフはまた、国連の「女性に対する暴力をやめさせるトラスト・ファンド」のパートナーであり、国連「紛争下の性的暴力をやめさせる活動」の積極的なメンバーでもある。これは、紛争下での女性と女子に対する暴力を根絶させるために協働する12の国連機関の連合である。国連安保理事会決議第1882号と第1888号が、この目的を強化するために2009年に採択された。国連平和維持活動も性的暴力を防止するのに役立っている。

最近では、国の法体系の中で、ジェンダーによる暴力を防止することも多くなってきた。グアテマラで、ユニセフとそのパートナーは、性的暴力に関する法律のアドボカシー（政策提言）を行い、2009年に採択された法律に対して技術的な支援を行った。執行を確実にするために、ユニセフは現在、判事、検察、警察官に対する研修を行い、一般の人々が自分たちの権利を認識できるよう情報の提供にあたっている。

暴力から逃れることができた女性と子どもに対する支援を提供していない多くの国々で、ユニセフは、国内のパートナーと共に、保護と防止のためのメカ

## 南部スーダン：バイク型救急車で妊産婦死亡と闘う

世界では、妊産婦ケアや基礎保健ケアのサービスを受けにくい地域が多くある。スーダン南部では、車そのものの台数が少なく、道路網も、長く続いた内戦のために破損したままの状態である。自宅出産がほとんどであるため、出産時に合併症が起きた場合には、妊産婦を早急に保健センターに運べるかどうかで、生死の分け目につながることもある。スーダン全体の妊産婦死亡率、つまり女性が一生涯を通じて妊娠・出産により死亡する危険性（リスク）は、53分の1となっている。この数値は、中東と北アフリカ地域の平均の3倍近い高さである。スーダン国内のそのほかの推計値も、このリスクが1番高いのは南部スーダンの女性であることを示している。

2009年3月、ユニセフと南部スーダン自治政府とのパートナーシップにより、東エクアトリア州に、5台のバイク型救急車が導入され、妊産婦たちの生命が救われるようになった。独特のデザインのバイク型救急車。妊産婦はサイドカーに、背を預け、足を伸ばした形で乗ることができる。保健員や付き添いの人が同乗できるスペースもある。研修を受けた運転士が、妊産婦を農村部のコミュニティから、緊急産科ケアの設備を持つ、一番近い保健施設まで運ぶのである。運転士は、母子の退院の際もコミュニティまで送り届ける。このバイク型救急車の利点は、地元の機械工が修理できるという点である。おかげで保守点検費用が安く済む。

南部スーダンの女性たちにどのような恩恵があるのか、それは明らかだ。2009年にバイク型救急車のサービスを利用した170人の妊産婦には、死亡者がひとりもいなかったのである。この事業を成功に導いたのは、コミュニティの支援である。サービスを受けるための電話番号を木々に貼り、ラジオで放送し、教会でも通知した。バイク型救急車が妊産婦の家に近づけない場合は、バイク型救急車が入れる場所まで村人たちが妊産婦を運んだ。このバイク型救急車は、医療サービスが必要な子どもやおとなを送り届けるためにも使われている。

南部スーダンのバイク型救急車は、2005年に、マラウイのドーワ県で開始された母性保護プログラムにヒントを得たものである。マラウイではその後、ユニセフの支援によりサービスの規模が拡大された。10台のバイク型救急車を使って、妊産婦たちを、農村部から、無料の緊急産科ケアを受けられるドーワ県病院まで運ぶシステムである。2008年、ユニセフが同様のサービスを南部スーダンで導入してはどうかと政府に提案したところ、政府はすぐに合意した。

このプログラムに着目した多くのドナーの支援を受けて、政府は南部スーダン10州全体で、サービスとプログラムを拡大し、より多くの母親たちが、自分の子どもの成長を見守ることができるよう計画している。

ニズム設置に尽力している。パプアニューギニアでは、2009年末までに5つの家族支援センターが運営を開始した。ここでは医療、心理社会的、法的サービスを推定1万3,000人の女性と子どもに提供している。ユニセフは、州レベルの17の病院と6つの地区保健センターと共に、2012年までにはパプアニューギニアの20の州すべてにセンターが置けるよう、より多くのセンターの設置に向けて努力している。

女性性器切除（FGM）は、若い女の子に劇的で永久的な害を与える、ジェンダーに基づいた暴力である。この慣習をやめさせるため、ユニセフと国連人口基金（UNFPA）の共同イニシアティブが、現在、17のアフリカの国で実施されている。ブルキナファ

ソ、ガンビア、ソマリア、ウガンダは、2009年にイニシアティブに参加した。ユニセフの支援を得て、ウガンダの国会議員、地方行政の関係者、市民社会が、セネガルでの研修に参加し、効果がすでに明らかになっている戦略をどのように取り入れたらよいかを学んだ。ソマリアでは、プントランドとソマリランドでの3年間にわたるユニセフのアドボカシー（政策提言）のおかげで、28の地域コミュニティが、いっせいに女性性器切除をやめる宣言を行った。この有害な慣習を受けた15歳から49歳までのソマリアの女性は、推定98%にも上る。

ジェンダーの平等への進捗は、社会的な基準や行動様式を変えられるかどうかにかかっている。2009年、「虐待、今すぐやめて」というキャンペー

ンは、ザンビアの400万人近い人たちにメッセージを伝えた。ジェンダーによる暴力が特に深刻で、性的目的の男子・女子双方の人身売買が多く、強制的な労働が増加している5つの地区が対象となった。影響力を持つ地元の指導者、ザンビア大統領、NGO（非政府組織）、ユニセフが力を合わせ、人々の啓発にあたった。大統領は、ザンビア社会を苦しめているものとして、一番目に上げられるのがHIV/エイズ、二番目が性とジェンダーに基づいた暴力だと言及し、暴力を振るった人たちを「絶対許してはいけない（＝ゼロ・トレランス）」と呼びかけた。



ウクライナのジトームイル地区で、生まれたばかりの双子の子どもたちを胸に抱くお父さん。

## ウクライナ：男性と父親の義務

ジェンダーの平等には、男性、女性、女子と男子、みんなが心に留めておかなければならないことがある。そのひとつが、父親も子どもの養育に積極的に参加しなければならない、ということである。社会の諸々の事情から、男性は積極的な父親になる方法を知らなかったり、その役割を担うことに二の足を踏んだりすることが多い。そこで、ユニセフはウクライナで全く新しい方策を広げる手助けをした。「お父さん学級」である。

「お父さん学級」は、2004年、ビニツア州で始まった。12歳の女の子の父親、エンジニアであるボロジミル・マルツェニウクさんが始めて、スウェーデン政府とユニセフが支援したものである。ボロジミルさんは、「自分はいたってふつうの人間ですよ」と言う。暴力に反対し、社会に変革を起こさなければいけないと感じていた。最初のインスピレーションは、スウェーデンにある、似たような施設からであった。

「最初は、くだらないアイデアだと言われました」とボロジミルさん。スウェーデン人は、ほかの人たちとはまったく違う生き方をするからだという。「でも、私の経験からすれば、男なんて、世界中どこでも同じです。」

ボロジミルさんは、まず6つのレッスンを開講した。科目は、父親としての責任に関連する、医学、財政、法的問題や、家庭内の争いを非暴力的な方法で解決する方法、料理や掃除といったより軽いがやはり重要な話題などである。ジェンダーについての討議は男性の考え方を変えた。この言葉は決して「禁句」ではなく、男性にとっても、女性にとっても、新しい機会を開拓するためのチャン

スであると（「親になる」という喜びを与えてくれるチャンスもその中に含まれる）。

ボロジミルさんが開発したイニシアティブをモデルにして、カザフスタン、キルギス、リトアニアにも父親学級が作られた。2009年、ユニセフはこれをウクライナの、チェルノブイリ原子力発電所事故の影響を受けた地域にまで拡大した。長きにわたって排除されてきた地域は、経済的にも選択できる幅が狭く、困難な状態が相変わらず続いている。

年度初めには、最初の父親学級がジトームイル地区で運営され始めた。各々のセンターでは、男性が男性に教える形で、どのようにすれば家庭内のもめごとを非暴力的に解決し、愛情溢れた、技術と責任をもった父親になれるかを教えている。父親たちは、ベビー・フードの準備の仕方を学び、子どもたちの出生登録を行う。ユニセフの調査結果で、この地域の男性たちは妊娠についての知識がほとんどないと分かっていたために、センターでは、妊娠前と後で女性の体がどう変化するかを教え、子どもの出産に際してどのように介助すればいいかについても教えている。

今日、ネットワークはウクライナの10の州をカバーし、これらの問題に積極的に関わるユニセフは、父親学級にまで変化をもたらしている。ジトームイル地区の母子センターでは、女性が帝王切開を受け、子どもをすぐに抱くことができない場合は、訓練により、乳児は父親の胸に預けられる。これは子どもの身体的、精神的な健康にとっても良い。